



2025年 5月9日 金曜日
(令和7年)

知・技の創造

ものづくり大学発

▷114◁

■調査研究について

2025年に本学に着任以来、これまでに50件を超える歴史的建造物の調査研究や修復設計・技術指導に関するご依頼を賜り、自身の専門分野となる近世社寺建築を嚆矢に、土民家や本陣建築のほか、近代の洋風建築や足袋蔵、特攻訓練も行われた戦争遺跡、さらには土木遺産となる河川のれんが造門樋や鉄骨造バランスドアーチ橋に加え、産業技術遺産となる蒸気機関車など、多岐に渡る歴史遺産の調査研究を学生と共に携わってきました。

上掲に伴う調査研究の手法は「実態調査」・「文献調査」

・「類例比較調査」の三柱を基軸に進めていくことになり

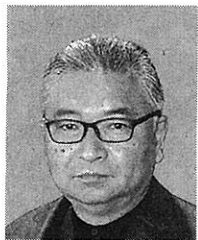
横山 晋一

建設学科教授

歴史的建造物の保存再生

ですが、大切なことは実践的な調査研究を通して歴史的建造物との対話がいかに行えるかが鍵となります。つまり、これには現状把握のための精緻な実態調査が必要で、室内空間だけに留まらず、床下・小屋裏・屋根裏と真つ黒に汚れながらも丁寧且つ敏速に膨大な調査を取り、それを整理

も限なく調べることで、復元考察が進められていきます。なお、近世以前の歴史的建造物は古写真が実在すること、は殆ど皆無であるため、この形式の社殿であることを明らかに



よこやま・しんいち 横浜国立大学大学院博士課程後期修了。博士(工学)。財団法人文化財建造物保存技術協会、立教大学を経て現職。専門分野は地域に残る歴史的建造物の保存再生と活用提案。

して図面化することが対話の第一歩につながります。

このような前提のもと、次のステップとして創建当初の姿がどのような形態であったかを探るため、建物を構成する主要軸部の柱や梁などに残存する仕口や埋木痕跡のほか、木材表面に残る釘穴などを

調査を行い、これらを踏まえながら対話の密度を高めて行けば、徐々に創建当初の姿が見えてくることになるのです。

■地方都市再生の鍵

首都圏に位置する埼玉県

かとすることができ、昨年の1月19日に国の重要文化財指定に導くことができませんでした。これにより、その歴史的建造物は地域のランドマークとなり、結果的にオンリーワンとなる地域ブランディング確立にも寄与し、例えば川越市の「蔵造りの街並み」のように、歴史の香りが漂う小江戸施策が官民によって打ち出さ

いずれにしても日々の積み重ねが重要であり、一朝一夕に研究成果の到達を見ることはできませんが、東松山市に所在する箭弓稲荷神社社殿は二年間に及ぶ調査研究の結果、近世最後の大規模権現造形式の社殿であることを明らかに

計画性を持って段階的に進められていますが、これからの時代は「土着性と新規性の融合」が地方都市再生の鍵だと考えられます。このためにも、地域に残存する歴史的建造物をバナキュラー建築に位置付け、保存再生と積極活用を点として掲げられます。

また、土着性と新規性の融合比率は、土着性の方が優位でなければなりません。これが過度に逆転すると地域特性を活かした街並み再生のコンセプトが瓦解する恐れもあり、関係者が特に留意すべき